

# いつも一緒 富山のペットたち

「ヘルニア」をご存じでしょうか。腸や脳などの体の臓器、脂肪や膜などの組織が、体の中の穴や切れ目を通して本来の位置から飛び出すことを言います。この穴や切れ目は、体内にもともとあることもあれば、事故や老化などが原因でできることもあります。



飛び出した場所が皮膚の下の場合、外から見ると瘤のように腫れています。臍の所なら「臍ヘルニア」、足の付け根の内側（鼠径部）なら「鼠径ヘルニア」、肛門の横（肛門と外陰部の間を会陰部といいます）なら「会陰ヘルニア」です。このように、ヘルニアができる部位により「ヘルニア」と呼ばれています。ちなみに、臍ヘルニアは血管が通っていた穴から、鼠径ヘルニアは血管と神経が通っている穴や老化とホルモンの影響でできた筋肉の隙間から、それぞれ小腸や大腸などの腸管、それを包む膜・脂肪などが飛び出し、瘤のように見えたものなのです。穴に入った腸管がそこから抜けなくなると、腸は壊死しま

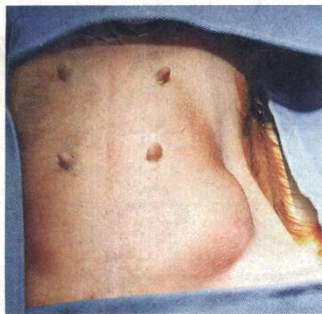
## それヘルニアかも

山王ペットクリニック院長  
(富山市上二杉)

大霜 唱治



椎間板ヘルニアの犬。激痛に耐え、じっとしています。



鼠径ヘルニアは、腸が入り込んで足の付け根の内側が腫れてくる



会陰ヘルニア。肛門の横が腫れて自力では排便できない

# 下腹部・会陰部に腫れ

す。会陰ヘルニアでは、排便が困難な状況が続きます。

**交通事故も原因**

ヘルニアは、交通事故などの外傷が原因で起こることもあり、また「横隔膜ヘルニア」は、胸を強打した結果、胸部と腹部を分ける横隔膜が破れ、肝臓や胃腸などの腹部の臓器が胸部に

飛び出したものです。肺が拡張できなくなり、動物は呼吸困難になります。

事故が原因のものには、肋骨の周辺部分の欠損（割れ目）に腸などが入り込んでしまう「傍肋骨ヘルニア」や、腹壁にできる「腹壁ヘルニア」もあります。

最近多いのが、脊椎を圧迫する「椎間板ヘルニア」です。脳に加齢とともに、また一部の犬種では若いうちから、椎間板の内部が硬くなるなどの変化が起

こります。外側の壁を破って脊髄側に飛び出し、脊髄を圧迫・刺激するのが、椎間板ヘルニアです。必ず激痛を伴い、圧迫の程度によっては麻痺が現れます。

**外科手術が必要**

このようにヘルニアには、瘤のように直接見えるタイプと、体の内部にあるため症状が出て

先ほど説明したように、臍や、足の付け根の内側、肛門の左右に、ビー玉からテニスボールくらいの大きさの瘤ができていませんか。帰宅した猫の元気がなく、呼吸が速いといったことはありませんか。またいつも元気な犬が、じっとして首を上げないで上目遣いに見える、体のどこかに触れただけで「キャン」と鳴いて痛がるといったことはないでしょうか。これらはヘルニアにも見られる症状です。

初めてヘルニアの存在が分かるタイプがあります。どちらも内科治療では効果が乏しく、外科手術（ヘルニアの修復）が必要です。しかも、緊急治療を要するケースが多いのです。

ペットの体を見てください。

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第一木曜日に掲載します。

2014(平成26)年6月5日  
北日本新聞